# 奔る（はし）

備後撚糸

## 今川　直子さん

いまがわ・なおこ
11年に備後撚糸入社。43歳。

# 「お嫁に出す気持ち」で作る和紙糸

川の流れに例えられるファッション業界で、その上流部に位置する撚糸。糸や生地の強度、風合いを左右する重要な工程だが、国内加工場は減少、技術やノウハウが失われつつある。広島県福山市の備後撚糸は、自立化のため和紙糸の自販に取り組み成果を上げる。今川さんは現場で機械の前に立ち、和紙糸生産を支えている。

一本の糸が出来るまでには、合糸、撚糸、ワインダー、検品など多くの工程を経る。特に和紙糸は伸度がないため加工が難しく、「毎回が未知の世界」。各工程での連携が必要なため、「次の工程を担当する人のことを考え、皆で話し合いながら」作業を進める。一本一本に思いを込め、出荷時にはまさに「お嫁に出す気持ち」。そうして出来た和紙糸は、扱いやすく風合いに優れるとニッターや機屋からの評価も高い。

勤め始めたのは11年。自宅から近い職場を探す中、同社の募集を見つけたのがきっかけだ。会社周辺は備後絣発祥の地として、古くから繊維業が栄えた地域だが、「撚糸も繊維産地ということも知らなかった」。だがベテラン職人から指導を受け試行錯誤するうち、やりがいと責任を感じ始め、今では仕上がりのチェックや指導も担っている。他の従業員から相談を受けることも多く、信頼を集める存在だ。

撚糸の生産現場では、細い糸を見つめ不具合を探したり、糸種に応じて重りやスピードを調整したり、細やかな神経が必要とされる。仕事を終え家に帰れば、中学生と小学生の子供3人を育てるお母さんでもある。「自社の糸を店頭で見かけるとうれしい。作業だけではなく、小さな気配りや職場の人間関係をつなぐのも役割と思っています」と今川さん。仕事と家庭の両立に忙しい日々を送る。